早稲田大学審査学位論文
博士（スポーツ科学）
概要書

スポーツ鑑賞能力とその教授方略
—舞踊を手がかりとして—

Appreciation ability of Sports and Teaching strategy：Focusing on Dance

２０１５年７月

早稲田大学大学院　スポーツ科学研究科
醍醐　笑部
DAIGO, Ebe

研究指導教員：　作野　誠一　准教授

【背景及び目的】

私たちは，スポーツ文化を受動的に享受するだけでなく，創造し，継承してきた．スポーツ鑑賞という行為に，文化創造・享受・継承の過程を内包し，研究されることで，スポーツ・マネジメントはスポーツ鑑賞という文化的営みを生起させるという広範かつ深遠な意味をもつと捉え直すことができる．そして，スポーツの文化的価値の拡大・創造を実現するために，スポーツ鑑賞に必要な能力を理解し，その伸長を企図する必要があろう．その先には，スポーツ鑑賞能力の育成が可能になるかもしれない．

このような視座に立って，本研究はスポーツ鑑賞行動の構造を理解した上で，スポーツ鑑賞能力を具体化し，その効果的な教授方略を明らかにすることを目的とした．

「スポーツ鑑賞」は，本研究における鍵概念として提案された．「観戦」とは結果としての勝敗に注目したスポーツの見方であり，「鑑賞」とは結果までの道のりを理解しながら多面的な視点を持つスポーツの見方であると定義付けた．

【研究Ⅰ：スポーツ鑑賞行動の構造化】

本研究は３つの研究から成り立っている．その第一段階として，スポーツ鑑賞を規定し，スポーツ鑑賞行動の構造を提示することが求められる．これまでの先行研究において蓄積のあるスポーツ観戦行動をもとに，知覚を含む行為・行動・体験としての観戦に関わる研究，スポーツの価値の享受，内面化を含む研究，表出化を含む意味づけや共有に関わる研究，最後に構造全体を支える知識創造に関する研究をレビューして，スポーツ鑑賞概念の構造を精緻化した．その結果，スポーツ鑑賞後の外面化や表出化が意味生成と文化価値の創造をもたらすことを複数の研究領域を考証することで明らかにしてきた．鑑賞対象としてのスポーツに含まれる価値はスパイラル構造の結果、所与の文化価値と所産の文化価値があること、内面化のフェーズを学習や情報収集と捉えることも可能であることも明らかとなった．

【研究Ⅱ：舞踊評論家の成長過程からみるスポーツ鑑賞能力の抽出とスポーツ鑑賞行動構造図の検証】

研究Ⅱの目的は，研究Ⅰによる先行研究から構造化したスポーツ鑑賞行動の構造をより具体化し，そこにあらわれるスポーツ鑑賞能力の構成要素を明らかにすることである．スポーツをみたその実態を形式化する人材やその能力はスポーツ経験者･実施者に限らず広く捉えてゆくべきとの問題意識に基づき，舞踊評論家の成長過程を明らかにすることで，そこに表れる能力を抽出した．さらに，第 3 章で提示されたスポーツ鑑賞の理論的構造の図に詳細な検討を加えることである．本研究はプロフェッショナル研究に依拠し舞踊評論家を「舞踊をみるプロフェッショナル」や「目の肥えた人」として調査の対象とした．

その結果，評論を書く以前には，形式化する力，身体共感力，集中力の３つが既に存在してい

た．評論を書き始めたころには，概念の多様化が起こり，説明力，客観力，分析力，情報整理力が抽出された．これらは類似した概念だが，入手した情報をどのように自分の血肉にするか，そのための力が様々な角度で表れたと言える．現在では，情報集約力，対応力，評価能力が挙げられた．舞踊評論家の成長過程において抽出された能力を，ブルームら（1971）による知識の高度化におおよそ一致している．さらにスポーツ鑑賞構造の構造図に配置することで，評論家の成長過程に表れる力は，ある箇所が初心者のころ特に強化されたり，ある箇所が長年の経験によって得られる力であると限定されるのではなく，評論を続ける中で構造全体として鑑賞能力が強化されていることが明らかとなった．

【研究Ⅲ：スポーツ鑑賞能力育成に向けた教授方略の立案―バレエ鑑賞教室を通じた実証的研究―】

研究Ⅰにおいて，スポーツ鑑賞後の表出化が鑑賞能力の伸長にとって重要なフェーズになることを明らかにした．また研究Ⅱでは，舞踊評論家のスパイラル型の成長過程における表出化フェーズの重要性を指摘した．そこで研究Ⅲでは，鑑賞能力に対する表出化の影響を検証するため，スポーツ鑑賞能力の学習方法による伸長の比較から，効果的な教授方略を考察する．鑑賞教育についての先行研究から舞踊を題材とした教授方略には「一方的解説型」「コミュニケーション型」「ワークショップ型」を想定した．本研究では，表出化の程度の弱い「ワークショップ型（WS 型）」と表出化の程度が強い「コミュニケーション型（COM 型）」を実施し分析の対象とした．なお，まったく表出化しない「一方的解説型」については筆者の過去の研究（醍醐，2015）が相当する．

その結果，表出化を伴う鑑賞を経験したグループ（COM 型）の方が，表出化を伴わなかったグループ（WS 型）に比べて「情報集約力」「形式化する力」「客観力」という鑑賞能力の伸長が確認された．これらの鑑賞能力をまとめると「得た情報を理解し知識とし，他者の意見を知ったうえで言葉や文章として表現することができる」能力である．スポーツ鑑賞行動の中に表出化のフェーズを意識的に設定しておくことでスポーツ鑑賞能力の一側面を高めることができる．しかし，表出化の程度が高いグループ以上に実際に踊るグループの方が楽しかったと感じる参加者が多く，どちらの教授方略にも良い面が認められた．

【総括】

「スポーツ鑑賞」という「観戦」に新たな視点を加えたスポーツの見方を提案することで，そこにあらわれる能力，能力伸長のための教授方略についてひとつの知見を示すことができた．見せ方や見方に関するこうした科学的知見は，スポーツをみることに関わる経営体に，一時的なスポーツサービスにとどまらずスポーツとの関わり方全体を視野に入れた有効な視座を提供するものと思われる．